

例外的使役構文と救済原則

坂 原 茂

1 導 入

この論文は、2つの目的を持っている。第1の目的は、筆者が知る限りでは、かつて論じられたことがなく、恐らく、その存在さえも指摘されることがなかった、例外的な使役構文の記述である。第2の目的は、この記述に基づく、例外的統語現象を可能にする原則についての考察である。また、合わせて、接辞代名詞の移動と等位構造縮約についての Kayne (1975) の主張の是非も検討する。

〈事実の提示〉

使役動詞 *faire* の補文の動詞の目的語である代名詞 *le, lui* などは、(1a)のように、*faire* の前に置かれる。もし、(1b)のように、代名詞が補文の動詞の直前に置かれるなら、非文法的な文と判断される¹⁾。

- (1) a. Il lui fait crever un œil.
b. *Il fait lui crever un œil.

ところが、たまたま、次のような注目すべき例を見つけることができた。

- (2) Pour une faute légère, il fait couper les oreilles au coupable ou lui crever un œil²⁾.

(1)にあげたような事実がある以上、(2)のような文がかなりマージナルなものであることは即座に納得できる。

このマージナルさは、現象的には2つの側面を持つが、根底では単一の事実である。第1には、文法性、あるいは許容度が低いということである。(2)の文に関しては、許容度はそれほど低いとは言えず、フランス人は、「この省略構文は一般化すべきではない」などという条件を付けた上で、誰でも一応は認める。この判断には、結合された文の完全な平行性とか、意味上のまとまりの良さなどが大きく関与する、第2のマージナルさは、結局は、

第1のマージナルさの直接的帰結で、こうした構文の使用例が極端に少ないということである。(2)を最初に目にしてから、5年ほど経っているが、こうした例はその後2度と見たことがない。そのため、(2)の文が言語理論に対して持つ意味を十分に引き出すには、類似の文を作り、その文法性を調べるしかなかった。この論文は、その調査に基づいている。

〈2つの仮説と救済原則〉

当初、この調査は、2つの仮説を検証する目的を持っていた。最初の仮説は、(3)のように、第2の文から主語および faire が省略された等位構造において、

- (3) …… faire V₁ ……, et/ou/ni ____ V₂ ……
 (ただし、V₂ ≠ 使役動詞 faire)

下線部 ____ の位置に現れることができる弱形の代名詞（または、接辞代名詞 *clitique*。すなわち、*le, lui, y, en* など）は、単文でもその位置に現われることができるものに限られる、という仮説である。

例えば、*crever* について考えるなら、

- (4) a. *Il crève un œil au coupable.*
 b. *Il lui crève un œil.*

のように、*lui* という代名詞は、単文でもその位置に現われることができる。したがって、(2)において、“*Il lui fait crever un œil.*” から、*fait* が省略された場合、支えの動詞を失った *lui* は、非常手段として、やむなく、(4b)のような単文で許される位置に舞い戻るのではないかという結論が得られる。これは以下のような原則としてまとめることができる。

(5) 救済原則

何らかの理由で非文法的な構造が生成される可能性が生じた場合は、独立に許容される次善の構造に復帰せよ。

自然言語にこうした原則が存在するのは、別の事実からも窺われる。例えば、次のような事実がある。フランス語では、原則として、所有を表わすのに、次の(6b)が示すように、“*de* + (強形の)代名詞”は使用できない³⁾。

- (6) a. *la maison de Jean.*
 b. **la maison de lui.*

c. sa maison.

ところが、偶然、共同所有が問題となった場合には、(7b)の形が許される。

(7) a. la maison de Jean et Marie.

b. la maison de lui et Marie.

c. *sa maison de _____ et Marie.

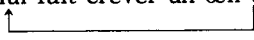
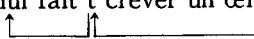
注意しなければならないのは、(7c)の非文法性は、例えば、次の Ross (1986=1967) の等位構造に対する移動制約により説明できる。

The Coordinate Structure Constraint: In a coordinate structure, no conjunct may be moved, nor may any element contained in a conjunct be moved out of that conjunct.

しかし、(7b)がなぜ許容されるかは、この制約からは説明することはできず、基本的には、別の問題である。つまり、所有を表す代名詞は、単独で現われようが、また等位構造に現われようが、必ず移動しなければならない、という規則を持つ言語は十分考えられる。そのとき、後者は、等位構造制約と矛盾を起すから、必ず非文法的となる。そのため、この言語では、代名詞を含む共同所有には、全く別の構文を使用せざるを得なくなる。しかし、フランス語が、こうしたタイプの言語ではないという事実は、等位構造制約だけからは説明できないのである。したがって、(7b)のような構造が許されるのは、(5)のような原則のためであろうと考えられる。

(7b)だけが問題であるなら、(5)の“独立に許容される次善の構造に復帰せよ”という言い方に代えて、“非文法的な構造を生み出す変形の義務的性格が緩和される”とか、“そうした変形を適用する必要がなくなる”とか言うこともできる（筆者の依拠する文法理論—関係文法—には、変形とか、規則の適用とかいう概念はないが、こうした言い方の方がわかりやすいであろうから、仮にこの生成文法的用語法で説明しておく）。ところが、使役構文の例(2)では、変形が阻止されるというこの言い方が、使役構文の派生をどのように考えるかにより、面倒な問題を引き起こす可能性がある。

それは、使役構文において、代名詞が、次の(8a)のように、いきなり使役動詞 faire の前に移動すると仮定するのと、そうではなく、(8b)のように、いったん補文内の動詞の前に移動し、その後、さらに faire の前に移動すると仮定するのとでは、結果が異なるということである。

- (8) a. Il lui fait crever un œil t.

 b. Il lui fait t crever un œil t.


(8a)の考え方をとるなら、“非文法的構造を生み出す変形の義務的性格が緩和され”ても、単に、(9)にしかならず、この文は依然非文法的である。

- (9) *Pour une faute légère, il fait couper les oreilles au coupable ou crever un œil (à) lui.

(8b)のように考えるなら、最初の移動の後、2度目の移動が阻止されれば、(2)が生成される。したがって、この言い方でも、一応は、解決がつく。ところが、(2)のような特殊な構文から離れた場合、(8a)が正しいか、(8b)が正しいかは、そう簡単には決定できない。さらに、Kayne (1975) にしろ、Rouveret & Vergnaud (1980) にしろ、代名詞が補文動詞の前に置かれた、“*Il a fait les acheter à Marie.”などを排除するため、細部を無視するなら、結局は、(8a)の形となる派生を仮定している。ところが、faire が省略されない通常の使役構文には適切である、この派生方法は、後に詳しく見る、この省略的使役構文を生成できないという欠点を持っている（ただし、Rouveret & Vergnaud では、y や en が補文のサイクルで動詞の前に移動する例として、“Marie a fait y aller Jean.”、“Marie a fait en parler Jean.”があがっているから、これらの代名詞が関係する省略的使役構文は生成できる）。そこで、派生がいかなるものであれ、(2)を生み出すことができる、“次善の構造に復帰せよ”という言い方をしておく方が、意図せぬ論争に巻き込まれる恐れがないぶんだけ無難であろう。

さらに、この問題自体が、取るに足らない2次的なものに過ぎないとも考えられる。移動が起こるのも、また移動の場所も、文法関係により規定されており、移動が文法関係を規定しているわけではない。同様に、移動の位置が変化するのも、単に文法関係の変化の結果に過ぎない。関係文法の考え方では、文法関係の変化は派生ではない。すなわち、ある文が複数のレベルを持つとき、そのすべてが構成する文法関係のネットワークがその文であり、いかなる情報も失われることはない。したがって、ある文の表層の形式を決定するのにそれ以前のレベルからの情報を利用することはなんら特殊な事実ではない。このため、関係文法で(2)のような特別な文を処理するのは比較的簡単である。すなわち、接辞代名詞はある文に対して文法関係を持ち、その文の述語の前に置かれる。ところが、その文が述語を失ってしまえば、以前に関係を持っていた述語の前に置かれる。“以前に関係を持

っていた”と言っても派生とは異なり、その文法関係が失われるわけではない。したがって、こうしたことも当然許されるわけである。

さて、ここで(2)のような省略構文の考察により検証しようとした第2の仮説に移ろう。詳細は後で触れるが、関係文法の反対格仮説では、表層主語が意味的に動作主でなければ、基底の構造では、直接目的語であるとされる。したがって、単文に関しては、表層のパターンと基底のパターンの不一致が存在することになる。

第1の仮説は、もっぱら表層のパターンに基づく。したがって、反対格自動詞の表層の主語が、たとえ基底では直接目的語であっても、単文の表層構造では主語である以上、(3)の下線部の位置に現われることはできないと予測できる。しかしながら、この第1の仮説の予測にもかかわらず、基底のパターンの方が強力で、反対格動詞の表層主語もこの位置に、le, la, les という形で現われることができるのではないかという可能性もそう簡単に否定することはできない。この第1の仮説に対する例外の存在が第2の仮説である。

ところが、調べた限りでは、この仮説は成立しないか、極めて弱い形でしか成立しないことがわかった。極めて弱い形とは、反対格動詞を含む次の例(10a)は非文法的であるが、反能格動詞を含む(10b)に比べれば、ずっとましだという、非文法性の程度問題のことである。

- (10) a. *Je ferai sécher ce chandail au soleil et le raccourcir un peu (=Je ferai sécher ce chandail au soleil et le ferai raccourcir un peu).
 b. **Je ferai venir les enfants et les courir dans le jardin (=Je ferai venir les enfants et les ferai courir dans le jardin).

こうした事実から、第1の仮説に対する例外事項である第2の仮説は、放棄せざるを得なかった。それにもかかわらず、この放棄は、暫定的な結論であり、もう少し詳しく調べ直すつもりである。したがって、得られた結果は概して否定的なものであったが、これも省略せずに述べておく。

2 救済原則と表層のパターン

この節では、第1の仮説に関するデータについて論じる。興味深いのは、次の(11)、(12)のような対を40ほどあげて文法性の判断を求めたところ、フランス人のインフォーマント自身が独自にほぼ同内容の説明を行なったことである。

- (11) a. Pour une faute légère, il fait couper les oreilles au coupable ou lui fait crever un œil.

- b. Pour une faute légère, il fait couper les oreilles au coupable ou lui crever un œil.
- (12) a. Je ferai faire la cuisine à Marie ou lui ferai laver la vaisselle.
b. *Je ferai faire la cuisine à Marie ou lui laver la vaisselle.

すなわち、許容可能な(11 b)の“lui crever un œil.”に対する単文(13)は正しい文であるが、許容不可能な(12 b)の“lui laver la vaisselle”に対応する単文(14)はいずれにしろ非文である、という説明である。

- (13) Il lui crève un œil.
- (14) a. *Je lui lave la vaisselle.
b. *Lui lave la vaisselle.

(14 a)の代名詞 lui は、受益者ではなく、動作主である。また、(14 b)の lui は強調の強形の代名詞ではなく、弱形の接辞代名詞と考えた上での判断である。したがって、この仮説は、もともとかなり常識的な内容を持っている⁴⁾。

2.1 使役構文の3つのパターン

使役構文には、3つの異なるパターンがある。したがって、ここで考察される等位構造で、いかなる種類の使役構文が関与しているかが不明確になる可能性がある。そこで、準備作業として、この3つの使役構文の特徴を簡単に見ておく。この考察の目的は、後に論じる等位構造で問題となる省略的使役構文は、文融合タイプの使役構文であり、補文主語を主文の直接目的語に繰り上げる上昇タイプの使役構文ではないことを示すことにある。

〈第1の使役構文—上昇構文〉

第1のパターンとして、上昇タイプの使役構文を取り上げよう。この種の使役構文の例としては、次のようなものがある。

- (15) ? Paul le fait voir la télé.

この文の基底構造は、次の(16)である。

- (16) Paul fait [il voir la télé]

(15)では、(16)の補文主語 *il* が主文に引き上げられ直接目的語 *le* となっている。この構文は *laisser* では現在でも極く普通の構文であるが、*faire* ではむしろ稀で、すべての人が許容するわけではない。このマージナルさのため、(15)を受け入れる人でも、補文主語が代名詞でない次のような例は不可とする。

(17) *Paul fait Luc voir la télé.

このタイプの使役構文の最大の特徴は、補文境界が残るということである。そのため、(15)の補文の直接目的語 *la télé* を代名詞化すると、代名詞は補文の動詞の直前に置かれる。

- (18) a. ? Paul le fait la voir.
 b. *Paul le la fait voir.
 c. *Paul la le fait voir.

この例ではたまたま “*le la*”, “*la le*” といういずれにしろ許されない代名詞の連続が起るので、(18b), (18c)の非文法性の原因がこの代名詞の連続に帰される可能性が残る。そこで、上昇構文の使役構文では補文境界が残ることをはっきり示すには、別の例を考えねばならない。

上昇タイプの使役構文では補文主語は常に主文の直接目的語となる。後に論じる文融合タイプの使役構文でも、補文が自動詞節のときは、補文主語は主文の直接目的語となる。したがって、上昇タイプの使役構文であることを明確にするには、補文は、他動詞節でなければならない。かつ “*le la*” などのような、いずれにしろ許されない代名詞連続以外の連続を生み出すことができない。この2つの条件を満たすのは次のような文である。

(19) ? Paul le fait envoyer une carte à Marie.

ここで補文の間接目的語を代名詞に置き換えると、次のような結果を得る。

- (20) a. ? Paul le fait lui envoyer une carte.
 b. *Paul le lui fait envoyer une carte.

この例では、(20b)が許容されない理由は明らかで、補文の代名詞が *faire* の前に置かれたことである。すなわち、この補文では、補文主語が主文に上昇した後も補文境界が残るた

め、補文の代名詞はこの境界を越えて移動することはできないのである。したがって、(20 a)は、次のような構造を持っている。

(21) [s Paul le fait [s lui envoyer une carte]]

この構文の補文だけを見ると、(2) (=Pour une faute légère, il fait couper les oreilles au coupable ou *lui crever un oeil*)と良く似ている。違いは、元来は補文主語である不定の名詞が消去され、直接目的語として表面に現われていないだけのことに過ぎない、といった印象を受ける。この考えが正しければ、(2)は上昇タイプの使役構文が結合され、第2の文から *faire* が脱落しただけの例で、何ら特記すべき事実のある例ではなくなってしまう。ところが、補文主語が脱落する使役構文は、第1のタイプの使役構文でないことが証明できるのである。結論を先に述べるなら、これは、ここでは第3のタイプとして論じる文融合2の例である。

〈第2の使役構文一文融合1〉

ここで第2のタイプの使役構文に移る。この使役構文の特徴は補文境界を取り除くことである。すなわち、出発点では複文構造であるが、到達点では単文構造となる。そのため、このタイプの使役構文は文融合と呼ばれる（正確には、主節と補文節が融合するので、節融合と呼んだ方が良いかも知れない）。文融合には、2つのタイプのものがある。第1のタイプの文融合では、次のような文法関係の変化が起る。

(22) 文融合1

自動詞補文節の主語と他動詞補文節の直接目的語は、主文の直接目的語となる。
他動詞補文節の主語は、主文の間接目的語となる。

同じ内容をもっと簡潔に表現する方法は以下ようになる（詳しくは、坂原 (1985—1986) 参照）。

(23) 文融合1

補文節の絶対格 (absolutif) は主文の直接目的語となる。補文節の能格 (ergatif) は主文の間接目的語となる。

このタイプの文融合は、補文の間接目的語に新たな文法関係を与えないため、補文間接目的語は常に失業し、その結果、接辞代名詞になる可能性を奪われる。そうした例は、例え

ば、次の(24)や(25)である((25)では, écrire の意味上の主語は ma secrétaire であるとする)。

- (24) a. J'ai fait téléphoner Luc à ses parents.
b. Je l'ai fait téléphoner à ses parents.
c. *Je leur ai fait téléphoner Luc.
- (25) a. J'ai fait écrire une lettre d'excuse à ma secrétaire au client.
b. Je lui ai fait écrire une lettre d'excuse au client.
c. *Je lui ai fait écrire une lettre d'excuse à ma secrétaire.

また、このタイプの使役構文では補文境界がなくなっているから、例えば、(25 b)で une lettre d'excuse を代名詞化すると、代名詞は主文の動詞の前に置かれる。

- (26) Je la lui ai fait écrire au client.

〈第3の使役構文—文融合2〉

次に第3のタイプの使役構文に移る。この使役構文でも補文境界は消滅するため、これを文融合2と呼ぼう。このタイプの文融合は概念的には、先の文融合1より簡単である。

(27) 文融合2

補文節で文法関係 α を持つ名詞句は、主文でも α を持つ。ただし、主文に既に α を持つ名詞句がある場合は失業する。

使役構文の主文は、補文を除けば、単に使役動詞と主語からできている。したがって、文融合2で失業する可能性があるのは補文主語だけである。このタイプの使役構文の例としては、次の(28), (29)があげられる。

- (28) a. J'ai fait téléphoner à ses parents par Luc.
b. Je leur ai fait téléphoner par Luc.
- (29) a. J'ai fait écrire une lettre d'excuse au client par ma secrétaire.
b. Je lui ai fait écrire une lettre d'excuse par ma secrétaire.
c. Je la lui ai fait écrire par ma secrétaire.

時に、失業者が par でなく、de でマークされることがある(下のもの“en”は、例えば、“de

son chien”の代名詞化とする)。

- (30) a. J'ai fait respecter ce vieillard de tout le monde.
b. Il s'en est fait obéir.

どのような動詞で失業者のマークとして par でなく、de が選ばれるかは、大体、受身での par と de の交代と同じである。

〈補文主語が消去される使役構文〉

さてそれでは、補文主語が表層の文に現われない使役構文は、この3つのタイプのどの使役構文であるのか、という問題に移ろう。例として、次の(31)を考えよう。

- (31) a. J'ai fait téléphoner à mes parents.
b. Je leur ai fait téléphoner.
c. *J'ai fait leur téléphoner.

(31 b)は、à mes parents が leur という代名詞に置き換え可能であり、かつこの代名詞は主文の動詞の直前に置かれることを示している。この代名詞の振舞が可能なのは、文融合2だけである。さらに、(31 c)の非文法性は、(31 a)が第1のタイプの使役構文ではありえないことを、さらにはっきりと示している。また、補文節が他動詞節である使役構文に関しても、得られる結論は同一である (le client は意味上は écrire の間接目的語とする)。

- (32) a. J'ai fait écrire une lettre d'excuse au client.
b. Je lui ai fait écrire une lettre d'excuse.
c. Je l'ai fait écrire au client.
d. Je la lui ai fait écrire.
e. *J'ai fait lui écrire une lettre d'excuse.
f. *J'ai fait l'écrire au client.
g. *J'ai fait la lui écrire.

以上の議論から、補文主語が表面に現われない使役構文は、第3のタイプの使役構文、すなわち文融合2の例であることがわかる⁵⁾。したがって、(2)を単に第1のタイプの使役構文が関係する等位構造の例として処理することはできないことが明らかとなった。

2.2 例外的使役構文と動詞の基本的構造

それでは、文融合が起っているにもかかわらず、主文の動詞が消去されたため、行き場を失った接辞代名詞が窮余の策として補文の動詞の前に置かれる、この例外的使役構文に関するデータを詳しく見て行くことにする。

〈faire の脱落の必要性〉

第1の事実は、ここでは使役動詞 faire の脱落が必要条件であり、単にそれ以外の要素の消去のため、代名詞が行き場を失っても、この構文は許されないことである。

- (33) a. Il a fait couper les oreilles au coupable ou lui a fait crever un œil.
 b. *Il a fait couper les oreilles au coupable ou fait lui crever un œil.
 c. Il a fait couper les oreilles au coupable ou lui crever un œil.

(33b)において、lui が過去分詞 fait の前に置かれても、勿論、不可である。また、使役構文において、avoir だけの消去が可能であることは次の例から明らかである。

- (34) Il a fait couper les oreilles au coupable ou fait crever un œil aux parents de celui-ci.

したがって、(33b)が非文であるのは、代名詞の位置が原因である。

〈空所化との共起可能性〉

第2の事実は、この構文は空所化(Gapping)でも可能だということである。空所化とは、等位構造縮約の一種であるが、消去される要素が文の真中にあるという点でやや特殊である。その例は次のようなものである。

- (35) Jean a pris du poisson et Luc, de la viande.

問題の使役構文が現われているのは、次の例である。

- (36) a. Vercingétorix a fait couper les oreilles au coupable et César lui a fait donner une paire de gifles.
 b. Vercingétorix a fait couper les oreilles au coupable et César, lui donner une paire de gifles.

(36 a)では、代名詞 *lui* の先行詞は、*Vercingétorix* であっても、*le coupable* であっても良い。(36 b)でも、この2つの可能性は全く無いとは言えないが、*lui* の先行詞は *le coupable* であるとする解釈の方が圧倒的に好まれる。すなわち、構文上の崩れが大きくなると、逆に構文上の平行性が大きくなるような解釈が優勢となる。

〈比較構文〉

この省略構文は、比較構文での省略によっても作り出すことができる。

- (37) a. Il fait couper les oreilles aux coupables plus souvent qu'il ne leur fait crever un œil.
 b. ? Il fait couper les oreilles aux coupables plus souvent que leur crever un œil.

(37 b)は、一応は可能と言えるが、あまり好ましい文ではないようである。

〈同一指示を含まない例〉

今までの例では、最初の文に普通の名詞で現われた要素が、第2の文で代名詞になっていた。ところが、同一指示の名詞句が省略構文の代名詞となる、このパターンは必ずしも必要ではない。

- (38) Il fera couper les oreilles à votre père, ou vous donner une paire de gifles.

この例では、依然、“votre père”の中に、第2の文で現われる代名詞 *vous* が含まれているとも言えるが、このような弱い同一指示さえも見られない例も可能である。

- (39) Il fera couper les oreilles à Jacques ou vous donner une paire de gifles (,puisque vous êtes son supérieur et responsable de sa faute).

〈代名詞の数はひとつとは限らない〉

第5の事実は、この特殊構文の代名詞の数はひとつには限られないということである。

- (40) Il fait casser les bras au coupable ou même les lui couper⁶⁾.

〈複数個の代名詞の部分的消去可能性〉

第6に、上の事実を利用して、2つの代名詞が現われる可能性があるときに、そのうち

のひとつを *faire* と一緒に消去できるかどうかを考えてみよう。代名詞が *faire* と一緒に消去できることは既に論じた。ここで、そうした例をもうひとつあげておこう。

(41) Il les fait casser au coupable ou même couper à son père.

まず、*faire* の消去のない文は次のものである。

(42) Il les fait casser au coupable ou même les lui fait couper.

この文から *faire* を消去すると、第1文で既に代名詞で現われている *les* は、この消去と一緒に消えるべきか、それとも残るべきか、または、どちらでも良いのか。これは消えるべきなのである。

- (43) a. ? Il les fait casser au coupable ou même lui couper.
 b. *Il les fait casser au coupable ou même les lui couper⁶⁾.

〈動詞の表層パターンとの関連〉

第7の事実は、*faire* の脱落した省略的使役構文で、補文節の動詞の前に現われることのできる代名詞は、その動詞の基本構造とどんな関係にあるか、という問題である。結論は既に導入のところで述べてしまったが、この省略的使役構文で許される代名詞は、その動詞が単独で使われたときに許される代名詞と一致する。したがって、それは基底構造においても、その動詞の直接目的語、間接目的語、地格などに対応する代名詞である。一方、その動詞の意味上の主語は許容されない（ただし、反対格動詞の表層の主語にあたる要素では、許容度はかなり高いものもある。これについては、後に論じる）。

〈反能格自動詞のデータ〉

まず、省略的使役構文に現われる動詞が、動作主である主語を持つ自動詞（すなわち、反能格自動詞）である例から始める。さらに、文融合を含む使役構文との関連では、反能格自動詞は2つのクラスに分かれる。最初のクラスは、文融合1のみが可能な自動詞で、これは *courir* のように、間接目的語を持たない自動詞である。第2のクラスは、*téléphoner* に代表される、間接目的語を持つ自動詞で、このクラスの自動詞では、文融合1、文融合2のいずれも可能である。

そこで、*courir* を第1のクラスの反能格自動詞の例にする。この動詞は地格の補語と共に起し、これは代名詞 *y* で置き換えられる。

- (44) a. Jean court dans le jardin.
b. Il y court.

一方、省略を含まない使役構文では、courirの主語は、文融合の後には、文全体の直接目的語となる。

- (45) a. Paul fait courir Jean dans le jardin.
b. Paul l'y fait courir.

地格代名詞 y だけを含む省略的使役構文が許容されることは、次の例から明らかである。

- (46) Il a fait sortir les enfants dans le jardin et y courir l'un d'eux⁷⁾.

次に、courirの意味上の主語も代名詞化してみる。

- (47) *Il a fait sortir les enfants dans le jardin et les y courir.

これは許容されない（もちろん，“Il a fait sortir les enfants dans le jardin et les y a fait courir”は文法的である）。(46)と(47)を比較すると、(47)が非文法的である理由は、courirの意味上の主語が代名詞化されたためであることがわかる。また、courirの意味上の主語だけが代名詞化され、地格代名詞 y を含まない省略構文も簡単に作れる。

- (48) a. Il a fait venir les enfants et les a fait courir dans le jardin.
b. *Il a fait venir les enfants et les courir dans le jardin.

courirに関する結論は、自ずから明らかであろう。

ここではcourirは自動詞であると仮定した。ところがこの動詞には他動詞としての用法もある。

- (49) a. Il court toujours les filles.
b. Il les court toujours.

そこで、それ以前の例に含まれるcourirを他動詞と解釈すると（意味上の主語は表面には

現われない), 不可と判断された例文もほとんど許容可能となるのが見られる。しかし, これは当然予測すべき結果である。

この種の曖昧さを避けるため, およびデータの数を増やし, 先の事実は *courir* だけに特殊な事実ではないことを示すため, *revenir*, *jeûner*, *partir* を含む例をあげておく。これらの動詞には, 自動詞としての用法しかない。

- (50) a. Il faut faire travailler cet enfant ou le faire revenir chez ses parents.
b. *Il faut faire travailler cet enfant ou le revenir chez ses parents.
- (51) a. L'entraîneur a fait suivre la discipline à Paul et l'a fait jeûner pendant deux jours.
b. *L'entraîneur a fait suivre la discipline à Paul et le jeûner pendant deux jours.
- (52) a. Il a fait faire sa valise à Luc et l'a fait partir tout de suite.
b. *Il a fait faire sa valise à Luc et le partir tout de suite.

これらの例では, 省略的使役構文に現われる直接目的語の代名詞は, 意味上, その直後にある動詞の主語としか解釈できないようになっている。しかし, その解釈において, いずれの例文も許容されない。しかも, ここでのように, 許容可能な文と対になって呈示されれば, どんな意味が問題になっているか見当もつくが, 単独では, それさえも困難である。

次に, *téléphoner* の例に移る。単文と省略を含まない使役構文の例は次の通りである。

- (53) a. Marie téléphone à ses parents.
b. Elle leur téléphone.
- (54) a. Paul fait téléphoner Marie à ses parents.
b. Paul la fait téléphoner à ses parents.
c. *Paul leur fait téléphoner Marie.
- (55) a. Paul fait téléphoner à ses parents par Marie.
b. Paul leur fait téléphoner par Marie.

ses parents は Paul の両親とも, また, Marie の両親とも解釈できるが, 代名詞化に関してはこの事実は何の影響も及ぼさない。

(54) のような文融合 1 の例では, 代名詞化は *téléphoner* の意味上の主語しか問題にならない。

- (56) a. J'ai fait venir les enfants dans mon bureau et les ai fait téléphoner à leurs parents.
 b. *J'ai fait venir les enfants dans mon bureau et les téléphoner à leurs parents.

念のため、文融合 1 で、かつ téléphoner の間接目的語が代名詞化された例も考えよう。

- (57) a. *Je ferai écrire une lettre aux parents de ces frères par ma secrétaire ou leur ferai téléphoner l'ainé.
 b. *Je ferai écrire une lettre aux parents de ces frères par ma secrétaire ou leur téléphoner l'ainé.

(57 a) で、l'ainé の前に前置詞 par を補うと、この文は許容可能となる。ただし、その場合は、もはや文融合 1 の例でなく、次に論じる文融合 2 の例である。

次に、文融合 2 の例に移る。ここでは、主語はそもそも接辞代名詞になりえない。また、téléphoner の間接目的語は、文融合の後には、複合動詞 faire téléphoner の間接目的語となる。文融合 2 の関係する省略的使役構文には、失業する補文主語の処理に関し、次の (58)、(59) の 2 通りの可能性がある。

- (58) a. Je ferai écrire à Jean par ma secrétaire ou lui ferai téléphoner.
 b. Je ferai écrire à Jean par ma secrétaire ou lui téléphoner.
 (59) a. Je ferai écrire à Jean par ma secrétaire ou lui ferai téléphoner par son frère.
 b. ?? Je ferai écrire à Jean par ma secrétaire ou lui téléphoner par son frère.

(58 b) では、省略的使役構文から téléphoner の意味上の主語は消えている。この場合、それは、第 1 の文に現われる ma secrétaire と解釈される（少なくとも、それが普通の解釈である）。(59 b) では、第 2 の文にも、téléphoner の意味上の主語が失業者として現われている。一方、単文では、動作主である主語に加えて、“par + 名詞句” で表わされるもうひとつの動作主が現われることはできない。

- (60) *Je lui téléphone par son frère.

したがって、(59 b) の許容度はかなり落ちるようである。この判断には個人差がある。金沢大学外人教師 Philippe Deniau 氏は、この種の例はすべて不可とする。一方、パリ第 8 大学 Gilles Fauconnier 氏は、この種の例を比較的容易に許容する。しかし、傾向として

は、独自の動作主が現われない方が許容度は高い。その方が、動詞の基本構造に近いからである⁸⁾。

それから、(58 b)の変種として、補文主語である動作主が、結合されるいずれの文にも現われない、(61)のような例もあることを付け加えておこう。

(61) Je ferai écrire à Jean ou lui téléphoner.

この種の例が、最も受け入れやすいかも知れない。

〈他動詞のデータ〉

次に、他動詞に移り、まず文融合 1 の例から見て行く。

- (62) a. Il a fait désherber le jardin à son fils et lui a fait promener le chien.
b. *Il a fait désherber le jardin à son fils et lui promener le chien.

(62 b) からわかるように、補文の主語は、この構文では代名詞化できない。次の例では、補文の直接目的語が代名詞化されている。

- (63) a. Il a fait désherber le jardin à son fils et l'a fait aplanir au jardinier.
b. ? Il a fait désherber le jardin à son fils et l'aplanir au jardinier.

これは許容度が高い (cf. “*Il applanit le jardin au jardinier.”)。補文間接目的語は文融合 1 では失業し、代名詞化できない。したがって、ここでは扱わない。

他動詞の文融合 2 は、この論文の最初で取り上げた (2) がその例である。ここでは、補文主語は失業し、par でマークされる。また、表面から全く消えてしまうこともある。(2) は後者の例であった。また、par でマークされる補文主語が、第 2 の文である省略的使役構文に現われると許容度がやや落ちることも論じた。まず、補文の直接目的語が代名詞化される例を見よう。

- (64) a. Je ferai brûler ce document ou le ferai cacher.
b. Je ferai brûler ce document ou le cacher⁹⁾.

第 1 の文に、par でマークされる動作主が現われる例、および、第 2 の文に par でマークされる動作主が現われる例を示す。

- (65) a. Il a fait suivre cette femme par ses hommes et l'a fait kidnapper dans les bois.
 b. Il a fait suivre cette femme par ses hommes et la kidnapper dans les bois.
- (66) a. Il a fait courir les enfants dans les bois et les a fait assassiner par un tueur à gages.
 b. ? Il a fait courir les enfants dans les bois et les assassiner par un tueur à gages.
- (67) a. J'ai fait écrire des chansons par les enfants et les ai fait chanter par les parents.
 b. ? J'ai fait écrire des chansons par les enfants et les chanter par les parents.

間接目的語が代名詞化されている例は、先の(2)である。そこでの間接目的語は、主として、身体のある部分を表す名詞句が現われるときに、その所有者を表す、いわゆる分離不可能の (inaliénable) 間接目的語であった。これは、以前の téléphoner の例からもわかるように、不可欠な条件ではない。例えば、次の例文の省略的使役構文に現われる間接目的語は、このタイプの間接目的語ではない。

- (68) a. Il fait couper les oreilles au coupable ou lui fait donner une gifle.
 b. Il fait couper les oreilles au coupable ou lui donner une gifle.

以上で、一応考えられる限りの可能性を覆い尽したことになる¹⁰⁾。ここから得られる結論は、導入で救済原則として述べておいた傾向に一致する。すなわち、使役構文でありながらも、使役動詞を失った省略構文で許される代名詞化は、そこに含まれる動詞の基本構造として、独立に許容されるパターンと同一である。

3 反対格仮説と省略的使役構文

この節では、非常に弱い形でしか検証されなかった、第2の仮説について論じる。この仮説のポイントは、この論文で扱われている省略的使役構文で、基底を成す意味構造と、その表層の表れ方の、どちらが優位を占めるかということであった。得られた結果は、表層のパターンの方が、優勢であることを示している。

〈反対格自動詞とそれに対応する他動詞の用法〉

反対格仮説とは、ある種の自動詞の表層の主語は、基底構造では直接目的語として導入されるという内容を持つ仮説である。この種の自動詞の表層主語は、意味的には、被動作

主 (patient) である。この動詞に他動詞としての用法がある場合には、文法関係を変えるような統語過程がなければ、この被動作主は、表層でも直接目的語となる。したがって、このような動詞に自動詞としての用法と、他動詞としての用法が見られる場合、次のようなパターンを示す。

- (72) a. NP₁ V
b. NP₂ V NP₁

一例をあげれば、次のようなものがある。

- (73) a. Mon chandail a jauni au soleil.
b. Le soleil a jauni mon chandail.

一方、動作主を主語とする反能格自動詞に、他動詞としての用法が見られる場合には、(72)とは異なり、(74)のパターンを示す。

- (74) a. NP₁ V
b. NP₁ V NP₂

この種のパターンの動詞には、courir, chanter, écrire などがある。

反能格自動詞が、(72)のパターンに現われるときは、これは単なる見せかけにすぎない。例えば、démissionner には、次のような2つの用法がある。

- (75) a. Le ministre de l'Education a démissionné.
b. Le premier ministre a démissionné le ministre de l'Education.

辞職するという行為は、最終的には、辞職する人が決定することであり、かつ、辞職するかしないかのどちらも選ぶことができる状況でなければならない。この選択の可能性がなく、辞職するしかない場合は、辞職とは単に形式的なものにすぎず、実際は首切りである。したがって、この場合により適切な表現は、renvoyer, congédier などである。(75 b)は、形式上は辞職であるが、実際は首切りであることを示す言い方にすぎず、いうなれば、社会機構上の婉曲語法 (euphémisme) が、言語表現に反映されただけのことである。したがって、こうした例は、先に述べたパターンの反例を成すものではない。それどころか、逆にこうした用法の特殊さが、先のパターンの存在を際立たせる。すなわち、このパターンか

ら外れた用法は、何らかの点で、特殊な第2義の意味を浮き立たせることになるのである。

このパターンに触れた理由は、使役構文で反能格自動詞をテストしているつもりで、実際には、その他動詞としての用法をテストしていたりする誤りを避けるためである。例えば、次の(76)は2通りに解釈できる。

(76) J'ai fait jaunir mon chandail au soleil.

ひとつは、自動詞 jaunir の例であり、もうひとつは、隠れた動作主を持つ他動詞 jaunir の例である。このどちらが問題になっているかで、結果が異なるのである。

(77) a. J'ai fait sécher mon chandail et l'ai fait jaunir au soleil.

b. ? *J'ai fait sécher mon chandail et le jaunir au soleil.

(78) a. J'ai fait laver mon chandail par la bonne et l'ai fait jaunir au soleil.

b. J'ai fait laver mon chandail par la bonne et le jaunir au soleil.

もちろん、これらの文も曖昧さを残しているが、(77)の判断は、jaunir を自動詞と考えた上でのものであり、(78)では、jaunir は他動詞と見なされている。sécher にも他動詞としての用法があるため、(77b)を隠れた動作主のある他動詞の例、すなわち、基本的には(78b)と同じ構造を持つ例と見なすこともできる。このように、反能格自動詞の振舞いをテストしているつもりで、全く別のテストを行なっている可能性がある。courir についても同じような注意が必要であったが、ここでは、さらに細心の注意が要求される。なぜなら、courir などでは、自動詞の主語であるか、他動詞の目的語であるかにより、その行為での役割が異なる。ところが、反対格自動詞とそれに対応する他動詞では、役割は同じである。また、反対格自動詞が、そのままの形で他動詞として用いられるのは極めて普通のことであり、mourir と tuer のように自動詞と他動詞で形が変わる方が、むしろ稀である。後にあげる例では、他動詞としての解釈が可能な場合でも、自動詞としての解釈のみを取り上げる。

3.1 反対格自動詞と反能格自動詞の統語的差異

フランス語で、反対格自動詞と反能格自動詞を区別すべき、いくつかの統語事実がある。これは、既に別のところ(坂原(1985-1986))で論じた。この調査の狙いのひとつは、新たに、この区別を支持する事実をひとつ付け加えることであった。そのため、以前に述べた事実を簡単にまとめておく。

第1の事実は、非人称構文に関するもので、反対格自動詞は非人称構文に現われることができるが、反能格自動詞は非人称構文に現われることは、極端に難しく、大概は、許容

されない。

- (79) a. Il lui est venu beaucoup d'idées.
b. *Il lui a téléphoné beaucoup de femmes.

第2の事実は、主語からの en の遊離である。これは現象そのものがかなりマージナルなものであるので、反対格自動詞が用いられているからといって許容されるとは限らない。しかし、それが可能なのは反対格自動詞のみであり、反能格自動詞の文はすべて不可である。

- (80) a. La confirmation en sera arrivée au moment crucial.
b. *L'auteur en a téléphoné à la maison d'édition.

第3の事実は再帰代名詞に関するものである。反対格自動詞は再帰代名詞と共起できないが、反能格自動詞にはそれが可能である。

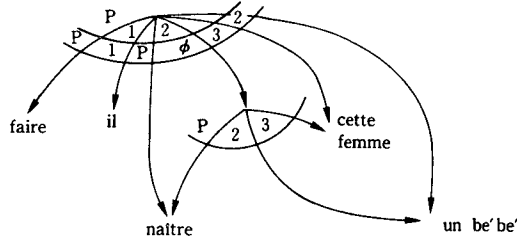
- (81) a. *Jean se semble avoir commis une erreur grave.
b. Jean s'est répondu dans un rêve.

第4の事実は、反対格自動詞には文融合2しか見られないが、反能格自動詞には、文融合1および文融合2のいずれも可能なものがある。

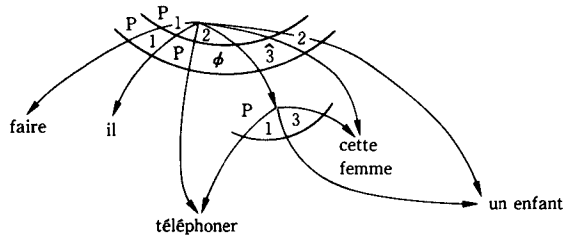
- (82) a. Il a fait naître un bébé à cette femme.
b. *Il a fait naître à cette femme par un bébé.
(83) a. Il a fait téléphoner un enfant à cette femme.
b. Il a fait téléphoner à cette femme par un enfant.

(82a)は表面的には、文融合1のように見えるが、これは文融後2の例である。すなわち、この例では、補文の直接目的語 un bébé は、主語に昇格することなく、文融合2で主文の直接目的語になっている。一方、最初から補文の主語である(83a)の un enfant は、文融合1の適用後に主文の直接目的語となる。この差は次の2つの層図表で示すことができる。

(84)



(85)



第5の事実は、第4の事実の直接的結果である。(82a)の *cette femme* は失業を免れているが、(83a)の *cette femme* は失業している。そこで、表面上は全く平行的であるが、*cette femme* を代名詞に置き換えると次の差が出て来る。

- (86) a. Il lui a fait naître un bébé.
b. *Il lui a fait téléphoner un enfant.

第6の事実は、反能格自動詞の補文主語はマージナルながら、*lui* の形で現われることがあるが、反対格自動詞の表層の主語が使役構文で間接目的語になることはない。

- (87) a. *Il lui a fait naître à cette femme.
b. Il lui a fait téléphoner à cette femme.

(87b)を受け入れない人についても、許容度の差は歴然としている。

この他にも、さらにマージナルな現象として、非人称受身構文がある。反能格自動詞のあるものは、例えば、次の例のように、この構文で許容される。

- (88) Il a été procédé à une enquête.

反対格自動詞には、この構文は許されない。

以上の事実を、個別に取り出せば、そのひとつひとつの説得性は限られている。反対格仮説の有効性は、そのすべてを容易に説明できるという点にある。したがって、この仮説

を廃棄しようと思えば、それ以前に、これらの事実をすべて別の方法で説明できなくてはならない。

3.2 反対格自動詞に関するデータ

ここでは、省略的使役構文との関連における反対格自動詞についてのデータを示す。この中でも比較的許容度が高いと判断されたのは最初の例で、後は一律に許容不可能という結果であった。

- (89) a. Cette teinture fera rougir ton chandail ou le fera jaunir.
b. ? Cette teinture fera rougir ton chandail ou le jaunir.
- (90) a. Le vent a fait voltiger des feuilles et les a fait tourner en l'air.
b. *Le vent a fait voltiger des feuilles et les tourner en l'air.
- (91) a. La lumière fait briller ce bijou ou le fait scintiller.
b. *La lumière fait briller ce bijou ou le scintiller.
- (92) a. La joie n'a pas fait briller son visage ni ne l'a fait rougir.
b. *La joie n'a pas fait briller son visage ni ne le rougir.
- (93) a. En laissant ouverte la porte du frigo, il a fait dégelé la viande et l'a fait pourrir.
b. *Il a fait dégelé la viande et le pourrir.
- (94) a. Tu veux faire apparaître une différence ou la faire disparaître ?
b. *Tu veux faire apparaître une différence ou la disparaître ?
- (95) a. On doit faire interdire ce livre ou le faire disparaître complètement des librairies.
b. *On doit faire interdire ce livre ou le disparaître complètement des librairies.
- (96) a. Luc a fait tomber Jean de cheval et l'a fait mourir.
b. *Luc a fait tomber Jean de cheval et le mourir.

最後の例に関するインフォーマントのコメントでは、落馬が Jean の死の直接的原因であれば *faire mourir* ではなく、単に *tuer* と言うべきだそうである。*faire mourir* とは、多少ともサディズムを含む殺し方で、したがって、瞬間的でない過程の場合に適切な言い方だということであった。(96)をこの意味に解釈しても、結果は同一で、いずれにしろ不可であった。

以上のような結果であったので、反対格自動詞を含む例は、反能格自動詞を含む例と比べると、幾分ましであるくらいのことでしかなかった。もう少し明確な差が出ると予想し

ていたが、これは期待はずれに終わった。しかしながら、表層の代名詞の分布の方が、基底の意味構造より強力であることを示す、この結果は、図らずも、仮説1が例外なく成立することを示しており、この仮説の正しさから得られる、仮に救済原則と名付けた傾向の一般性を明らかにしていると言えよう。

4 等位構造縮約

等位構造の省略構文を扱いながら、これまでは、特に、その省略自体には目を向けることはなかった。この節では、等位構造縮約についてのいくつかの事実を、先に論じた特殊な使役構文との関連で取り上げる。等位構造“A et B”においては、AまたはBが単独で考察された場合不完全であり、何らかの省略がある場合が多い。例えば、次の(97)では、第2の文の主語が脱落しており、一方、(98)では、第1の文の直接目的語が（それに加え、第2の文の主語も）脱落している。

(97) Jean aime beaucoup Marie et lui téléphone tous les jours.

(98) Jean a conçu et a réalisé un nouveau modèle de voiture.

こうした場合、表面上脱落している要素は、結合された別の文にあるため、容易に復元可能である。等位構造縮約とは、何らかの省略を含む文と、その省略された要素が復元された形の文との関係である。別の言い方では、何ら省略を含まない等位構造“A et B”において、AとBがある共通の要素を持つとき、等位構造縮約は、AまたはBのどちらかにある共通要素を消去する、ということになる。

フランス語には、この縮約が動詞の直前にある *le, lui* などの接辞代名詞に及ぶ場合は、代名詞を単独で消去することはできず、直後の動詞と一緒に消去しなければならないという興味深い現象がある。Kayne (1975) はこの事実に基づき、“接辞代名詞+動詞”という連続は、統語的には、単一の動詞と見なされると主張している。4.1は、このKayneの主張について論じる。また、Kayneは彼の主張を説明するため、接辞代名詞の移動が先に起こり、次に等位構造縮約が起こると考えている。4.2では、使役構文を含む等位文を考察することで、Kayneの考えている規則の順序付けでは生成できない文のあることを示し、規則適用に順序付けを仮定する文法理論の不適切さを論じる。4.3では、使役構文の等位文のなかには、表現しようとする意味を考えた場合、より適切であるにもかかわらず、必ず非文法的な表層の文しか生成できない基底構造があることを示し、統語構造と意味構造の完全な平行性は実現不可能な理想であることを示す。

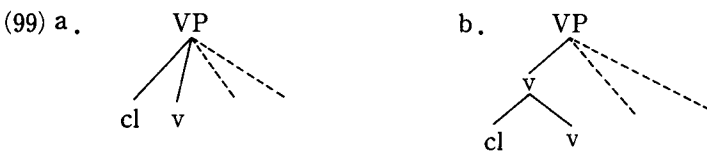
4.1 等位構造縮約と接辞代名詞

等位構造縮約は、大雑把な言い方では、省略を含まない等位構造“A et B”に、AとBに共通する要素が見られるとき、そうした要素を消去し、余剰性を減少させる統語現象である（この場合の接続詞は et に限定されるわけではなく、ou, mais, ni などであっても良いし、接続詞が全く現われない場合もある）。

この縮約の最も良く見られる例は、第1の文と第2の文の主語が同一であるときに、第2の文の主語を省略する例である（例、“Jean est allé à Paris et en est revenu tout de suite.”）¹¹⁾。逆に、主語が残り、その他の部分が消去されることもある（例、“Pierre sait nager comme un poisson et Jacques aussi.”）。これらの縮約では、消去される要素は、文頭または文末にあるが、中間にある要素を消去するような縮約も存在し、これは空所化（Gapping）と呼ばれる（例、“Marie est très belle, mais sa sœur, très laide.”）。さらに、空所化には、不連続な要素を同時に消去するような縮約も見られる（例、“Gilles considère Deleuze comme le meilleur philosophe contemporain et Jacques, Derrida.”）。また、一見、第2の文はそのままにしておいて、第1の文の要素を消去するような縮約もある（例、“Jean aime, mais sa mère déteste, Georges.”）。等位構造縮約には、良く理解されていない事実がたくさん残っている。特に、上に述べた4つのタイプの縮約の最後の2つは問題が多い。しかしながら、幸いなことに、これ以後の議論に関係するのは、文頭の要素を消去する第1のタイプの縮約に限られる。ただし、消去される要素は主語だけに限定されるわけではない。

このタイプの縮約に話を限定しても、依然、縮約には制約条件が課されている。その最大のものは、消去される要素が構成素（constituent）を成していなければならない、というものである。また逆に、構成素の一部だけの消去は許されない。Kayne は、この制約に基づき、接辞代名詞とその直後の動詞に関する、次のような議論を展開している。

まず、彼の主張は、接辞代名詞とその直後の動詞は、ひとつの構成素を形成し、それ全体を動詞として分析しなければならない、ということである。すなわち、この連続は単に“clitique+V”と分析すべきではなく、それをひとつの構成素とする動詞の範ちゅうを付け、[_v clitique+V]と分析する必要があるということである。これを樹状図で書くなら、次のようになる。



ここで、(99a)が正しい分析であるなら、代名詞だけ、また動詞だけを消去する縮約が可能であることになるが、(99b)が正しいければそうした縮約は許されず、その両方を消去す

る縮約だけが可能となる。

まず、第1の事実としては、そもそも“代名詞+動詞”という連続が整わない場合には、動詞だけの消去が許される、ということがある。

- (100) a. Paul a frappé son ami et a mis sa sœur à la porte.
b. Paul a frappé son ami et mis sa sœur à la porte.

第2には、この連続が生成された場合には、代名詞のみの消去(=(101b))も、動詞のみの消去(=(101c))も許されず、その両方を消去する(101d)だけが文法的となる。

- (101) a. Paul l'a frappé et l'a mis à la porte.
b. *Paul l'a frappé et a mis à la porte.
c. *Paul l'a frappé et le mis à la porte.
d. Paul l'a frappé et mis à la porte.

第3に、第1の文だけに、“代名詞+動詞”の連続が見られるときに、第2の文から動詞のみを消去する縮約は許されない。

- (102) a. Paul l'a frappé et a mis sa sœur à la porte.
b. *Paul l'a frappé et mis sa sœur à la porte.

すなわち、“l'a”(=le+a)という連続は全体として動詞として分析されるため、その中に含まれる“a”だけを取り出して、第2の文の“a”と同一要素と分析することができなくなる、ということである。

この3つの事実からは、Kayneの主張が正しいという結論が出てくる。第1の事実は、同一の動詞要素は消去できることがわかる。第2の事実は、“代名詞+動詞”の連続が生成された場合は、その全体が、消去可能な動詞要素として分析しなければならないことがわかる。第3の事実は、“代名詞+動詞”の連続に対する部分的同一性は、もはや縮約を可能にする構成素間の同一性としては不十分であることを示している。

以上の理由から、Kayneは、“代名詞の移動⇒消去”という規則の順序付けを提案している(p99, note 40)。実際、規則の適用に順序が存在すると仮定する理論では、Kayneの提案する順序付けが唯一可能なものであることは即座に証明できる。代名詞の移動と消去が、この順で適用されるなら、先の事実をうまく処理できることはすぐにわかる。そこで今度は逆の順序付けを仮定してみる。すると、(101c)と(102b)の非文法性が説明できなくな

る。例えば、(101c)は代名詞の移動が起こる前は、“Paul a frappé le et a mis le à la porte”という形をしている。この時点では、動詞句の最初の要素はともに“a”であり、これは基本的には(100a)と同じ構造だから、第2の文から“a”だけを消去する縮約が許されるはずである。ところが、これは事実には反する。したがって、この順序は不適格であることがわかり、結局、最初の順序付けだけが残る。

これまでの議論をまとめると、第1に、“接辞代名詞+動詞”は、唯一一つの動詞の範ちゅうを形成する、第2に、規則適用の順序は、接辞代名詞の移動、縮約の順であり、その逆ではない。以上が、Kayneの主張である。

4.2 使役構文の等位構造縮約

ここで、使役構文の等位構造に話を移そう。使役構文に関しても、Kayneの主張は、おおむね正しいように思われる。まず、使役動詞faireのみの消去が許されることは、次の対からわかる。

- (103) a. Je ferai faire la cuisine à Marie et ferai laver la vaisselle à Pierre.
b. Je ferai faire la cuisine à Marie et laver la vaisselle à Pierre.

ところが、“代名詞+動詞”の連続が生成された場合は、許される消去は、その両方を消去する(104d)だけである。

- (104) a. Marie le fera lire à Jean et le fera déchirer par Paul.
b. *Marie le fera lire à Jean et fera déchirer par Paul.
c. *Marie le fera lire à Jean et le déchirer par Paul.
d. Marie le fera lire à Jean et déchirer par Paul.

また、先の(102)同様、“代名詞+faire”の連続に対する部分的同一性は、消去を可能にするには不十分である。

- (105) a. Je le ferai venir avec ses enfants et ferai chanter l'un d'eux.
b. *Je le ferai venir avec ses enfants et chanter l'un d'eux.

ここまでの事実 Kayneの主張を支持する。

ところが、先にあげた特殊な等位構造の例(2)は、Kayneの主張が全面的に正しいわけではないことを明らかにする。この例文の問題となる部分を取り出し、代名詞の移動、縮約が

起こる前の構造を考えてみると、次のようになる。

(106) Il fait couper les oreilles au coupable ou fait crever un œil (à) lui.

この構造に、Kayne の仮定している順序で規則を適用してみよう。すると、まず代名詞の移動が起り、(107)を得る。

(107) Il fait couper les oreilles au coupable ou lui fait crever un œil.

これは文法的な文であるが、もはやこの文に等位構造縮約を適用することはできない。なぜなら、第1の文の“fait”と、第2の文の“lui fait”の中に含まれる“fait”は、消去可能な同一要素ではないからである。

これと類似の例(102)、(105)では、第1の文に“代名詞+avoir (faire)”の連続があり、第2の文に代名詞を欠く、avoir (faire)があるという順序であった。動詞が(102)のように複合時制の補助動詞 avoir のときは、(108)のように順序が変わっても、結果は同一である。

(108) a. Il a frappé Jean et l'a mis à la porte.

b. *Il a frappé Jean et le mis à la porte.

ところが、(107)のように使役動詞 faire が問題となるときには、faire だけの脱落が可能であることは、既に(2)からわかっている。そこで、“…動詞…et 接辞代名詞+動詞…”という順序では、この2つの動詞が同一であれば、第2の動詞は基本的には消去できるが、たまたま、消去すべき動詞の後に来る要素が mis のように過去分詞のときに限り、この消去が不可能になる、と考えることもできる。したがって、(2)は、(107)のような構造から、第2の文の“fait”が消去され生み出される、ということになる。

しかし、こう考えるべき理由はない。例えば、許容の使役を表す laisser は、(109a)のように、単なる繰り上げ構文で表わすことができる。ところが、この文から laisser だけを消去した(109b)は非文法的である。

(109) a. Il laisse ses enfants entrer dans son bureau et les laisse déchirer des livres.

b. *Il laisse ses enfants entrer dans son bureau et les déchirer des livres.

このため、Kayne の仮定している規則の順序付けでは、(2)の文が生成できないという結論になる。また、仮に、(107)において、第2の文から“fait”だけの消去が可能であれば、“接

辞代名詞＋動詞”が、唯ひとつの要素として分析されるという、彼の第1の、そしてもっとも重要な主張が崩れることになる。いずれにしろ、代名詞の移動、等位構造縮約という規則の順序付けを仮定するなら、生成できない文が残るか、主張のひとつを引っこめねばならなくなる。

次に、Kayneの仮定とは逆に、等位構造縮約、代名詞の移動という順序付けを考えてみよう。すると今度は、非文法的な(104c)が許されるはずであるという誤った予測に加えて、文法的な(104d)が生成できなくなるという、さらに不適当な結果になる。したがって、これは全く考慮するに値しない可能性ということになろう。ところが、まさに、この規則の順序付けが(2)の生成を可能にするのである。

結論としては、いずれの順序付けを選ぼうが、すべての事実を整合的に説明することはできない、ということである。したがって、ここであげた事実に関しては、規則の適用に順序を仮定する文法は、不完全にならざるを得ない。また、ある種の統語事実が規則適用の順序付けにより一応説明できたように思われる場合も、こうした説明の価値は疑わしいと考えねばならない。現在では、規則は適用条件が整えばいつでも適用でき、また適用する必要もない、という方向に変わっているが、恐らく、これが正しい方向であろう。これは基本的には、規則の適用に順序を設けないのと同じである。

4.3 等位構造縮約に関するその他の事実

等位構造縮約については、何らかの同一性(名詞句であれば同一指示¹²⁾、その他の要素については形態的同一性)が要求されるなどという当然な制約を別にすれば、最も大きな制約は表層の文法関係の同一性であろう^{13),14)}。これは、例えば、受身のような文法関係が変わる統語操作が起こるときは明白な事実である。

- (110) a. Jean a frappé Marie et elle a pleuré.
 b. *Jean a frappé Marie et a pleuré.
 (111) a. Marie a été frappée par Jean et elle a pleuré.
 b. Marie a été frappée par Jean et a pleuré.

また、縮約において消去の先行詞となる要素と消去される要素が、意味(＝格文法における深層格、あるいは生成文法の主題役割)に関して異なっても構わないのは(111b)より明らかであろう。実際、この文の最初の主語 Marie は被動作主(patient)であるが、消去された第2の文の主語は動作主である。消去はゼロ代名詞化と呼ばれることもあるが、この場合の代名詞化は表層からは消えてしまうだけに制限はより厳しい¹⁵⁾。等位構造縮約であれば同一の文法関係が要求され、同一指示代名詞句削除(Equi)であれば主語のみが消去

の対象となるといった具合である。

以上の事実から自然に出て来る結論は、等位構造縮約は文法関係を変える規則の適用の後に起こるということであろう。したがって、ここでの問題に関しては、使役変形が先で、その後に等位構造縮約ということになる。この順序付けは、これまでの議論では当然のこととされ、特に論じることはなかった。また、もし規則適用に順序があるなら、これが自然な順序であることもすぐわかる。例えば、次の(112)を見てみよう。

- (112) a. Il les a frappés et fait obéir.
 b. ?Il lui a promis un prix littéraire et fait écrire un roman.

(112 a), (112 b)で消去された要素は、複合時制の助動詞を除くと、それぞれ直接目的語、間接目的語である。ところが、消去された要素は基底構造ではいずれも主語であり、消去可能となるのは使役変形の後である。したがって、これらの文の派生には先の順序が必要である。

同じことは、等位構造に現われる文がともに使役構文であるような例によっても示すことができる。

- (113) a. Jean l'a fait promener dans les bois et fait kidnapper par son homme.
 b. Le kidnappeur leur a fait téléphoner par l'enfant et fait payer une rançon.

(113 a)では、表層の直接目的語は基底構造では (se) promener の主語であり、消去された直接目的語は基底構造でも kidnapper の直接目的語である。一方、(113 b)では、最初の間接目的語 leur は元来 téléphoner の間接目的語であるが、消去された方の間接目的語は、基底構造では payer の主語である。したがって、いずれの場合も、縮約の条件が整うのは使役変形の後であることになる。

(113)の文に関しては、さらに使役動詞の消去も可能で、そのときは次のようになる。

- (114) a. Jean l'a fait promener dans les bois et kidnapper par son homme.
 b. Le kidnappeur leur a fait téléphoner et payer une rançon.

これらの文については、基底の文法関係が異なるため、規則の適用順序に関して、別の可能性が起こることはない。

ところが、同種の文で、先行詞と消去される要素が基底構造でも同一の文法関係を持つ場合、別の派生が考えられるようになる。

- (115) a. Le vent les a fait voltiger et tourner en l'air.
 b. Le vent a fait voltiger et tourner en l'air des feuilles de platane.

(115 a)について考えると、この文は次の2つの基底構造のいずれからでも派生できるように思える。

- (116) a. [le vent a fait [elles voltiger]] et [le vent a fait [elles tourner en l'air]]
 b. le vent a fait [[elles voltiger] et [elles tourner en l'air]]

(116 a)では、風の作用は2つあることになるが (116 b)では、風の単一の作用が問題となる。(115 a)から受ける印象では、むしろ(116 b)の方が意味的にはより適切な基底構造であるように思える。(116 b)からの派生では、まず等位構造縮約が起こり(117)となり、その後に使役変形により(115 a)が生成される。

- (117) le vent a fait [elles voltiger et tourner en l'air]

規則に順序付けがある理論では、先に述べたように、使役変形、等位構造縮約の順でないで生成できない文があるため、(116 b)のような基底構造から(115 a)を生成することはできない。したがって、(115 a)は常に(116 a)の基底構造を持つことになる。ところが、意味の上では、(115 a)に対し、(116 b)のような基底構造を考えるのはむしろ自然なことのよう思える。したがって、可能性としては、(115 a)は風の作用が単一か、それとも2つあるかに関し曖昧な文ということになる。すなわち、次の(118 a)のように使役動詞 *faire* が表層でも2つあれば、風の作用が2つあったことになるが、(118 b) (= (115 a)) のように使役動詞 *faire* が1つしかない文では、必らずしも、そう断言することができなくなる、ということである。

- (118) a. Le vent les a fait voltiger et (les a) fait tourner en l'air.
 b. Le vent les a fait voltiger er tourner en l'air.

ここでの議論は、基底構造の使役動詞 *faire* の数は、そのまま、それだけの使役行為に対応するという仮定に基づいている。それでは、唯一の使役行為しかなかったとされる、次の基底構造について考えてみよう。

- (119) Jean a fait [[il travailler] et [il gagner de l'argent]]

(119)に対応する表層の文としては、どんなものが考えられるであろうか。どんなものも考えられないのである。すなわち、(119)は必ず非文法的な文に行き着くのである。例えば、次のようになる。

- (120) a. *Jean l'a fait travailler et gagner de l'argent.
 b. *Jean lui a fait travailler et gagner de l'argent
 c. *Jean a fait travailler et gagner de l'argent par lui.

これに近い意味を表わすには、使役動詞が2つ現われる次の文を使うしかない。

- (121) Jean l'a fait travailler et lui a fait gagner de l'argent.

したがって、このように、faireが2度表層に現われざるをえない文では、主語からの働きかけが1つあったか、2つあったかは曖昧とならざるを得ない。

それでは、この議論の目的はどこにあったのか。それは次の事実である。表現したい意味があっても、それを最も忠実に反映すべき基底構造が必然的に非文法的な文しか生み出さないならば、意味は犠牲にされ、次善の文法的な文を使わざるを得ない、ということである。ここでは、(119)と(121)の関係がそれに当たる。意図している意味が(119)であっても、この構造は必ず非文法しか生み出さないで、結局は、多少不適切な(121)で我慢するしかないのである。このことは、意味と統語事実の関係を考える上でも重要なことと思える。すなわち、統語構造はなるべく意味構造を忠実に反映しようとするが、それが不可能であれば、統語構造の方が優先するのである。そのため、統語レベルと意味レベルの間に完全な同型性 (isomorphisme), または準同型性 (homomorphisme) を想定する理論は問題があると言えよう。

5 結 論

この論文の出発点のごく単純なものであった。すなわち、使役構文および等位構造縮約の理論から考えると、非文法的と予測できるような文が実際に使われているということである。そこで、こうした省略構文が許される条件についての2つの仮説をたて、構文上のすべての可能性をテストし、それらの仮説の是非を検討した。その結果、この省略構文では、動詞の表層の基本パターンが大きな力を及ぼしていることが確認された。これはまた、例外的な統語事実を可能にする原則として、ここで救済原則と名付けられた原則の存在を示唆している。さらに、この特殊構文は、もっと標準的な統語事実から引き出せる等位構造縮約や代名詞の移動についての理論に、再考の余地があることをも明らかにする。

(注1)

ただし、後述するように、文融合でなく、上昇タイプの使役構文は別である(2.1参照)。

(注2)

César, 《Guerre des Gaules》, Livres V-VIII, Société d'Édition 《Les Belles Lettres》, p213. これは、シーザーのガリア侵略に対抗して立ち上がったガリア人たちを率いて、シーザーを危地に陥し入れたウェルキンゲトリクスについての記述である。(2)の前後の文脈は、「(規律を維持するためにウェルキンゲトリクスは)、重大な過ちが犯された場合には、火刑やあらゆる種類の刑罰で殺し、軽微な事例については、耳を切断するか片目を潰すかして、他の連中に対し、みせしめとなり、刑の厳格さで他の人々を恐れさせるために、家に送り帰す」というものである。また、(2)に対応するラテン語原文は、*leviore de causa auribus desectis aut singulis effossis oculis* という絶対奪格の状況補語で、(2)のフランス語訳のように独立した文とはなっていない。

(注3)

正確には、この禁止は、“定冠詞+名詞+de+代名詞”に対する禁止である。したがって、*une maison de lui* (=l'une de ses maisons), *quelques maisons de lui*, *cette maison de lui* などは許される(例。“Je ne connais qu'une/quelques/cette maison(s) de lui.” vs. “*Je ne connais que la maison de lui.”)。

(注4)

その他の興味深いコメントもあげておく。ひとつは文体的効果についてのものである。(2) (= (11b)) のような文は、まず、

Pour une faute légère, il fait couper les oreilles au coupable.

と言ってしまった後で、忘れていた事実があるのに思い付いて、

ou lui crever un œil.

と、付け加えたという感じがするということである。その付加の過程で *faire* が脱落する結果となる。実際、2つのことを頭に入れて発話するなら、

Pour une faute légère, il fait couper les oreilles ou crever un œil au coupable.

という形が使われる可能性が高い。

もうひとつは、この文がラテン語からの翻訳であるという事実に関係する。ラテン語では、単なる他動詞が用いられているときでも、実際上は使役の意味が隠されていることがある(例えば、“*Caesar pontem fecit* (=César fit un pont=César fit faire un pont)” のような例では、シーザー自身が自分で橋を作ることは実際上はあり得ないので、意味上は使役構文と解釈される)。そこで、(2)のラテン語原文がこのタイプの例文で、それをそのままフランス語に訳したのであろうという指摘である。しかし、これは、注2で述べたように、ラテン語原文は絶対奪格構文であり、この指摘は当たっていない。

とすると、すぐに考えつくもう一つの説明は、翻訳者は当然ラテン語の専門家であるため、ラテン語の特殊な事実が自分のフランス語にまで影響している、という考えである。しかし、いずれにしろ、(2)は普通のフランス人でも受け入れるわけであるから、どう考えようがフランス語の事実としての説明を要する。

付け加えておくと、単なる他動詞が用いられていても、実際に意味されている内容が使役的であるのは、フランス語にも見られる。例えば、ある友人が、

Je me suis coupé les cheveux.

と言ったので、“自分の髪の毛を切ったのか”と聞き返したことがある。この時の説明は、“Je me suis fait couper les cheveux.”だが、“Je me suis coupé les cheveux.”と言うことも良くあるということであった。

フランス語では *se faire couper les cheveux* の代わりに、*se couper les cheveux* を用いるのはやや例外的だが、日本語では、単に“切る”の方が普通である。また、*se faire couper les cheveux* も、“切らせる”より、“切ってもらう”の方が普通である。

(注5)

同じテストを、ここで論じた3つの構文をすべて容易に受け入れる *laisser* と *voir* でも行なった。a, b, c, d に対応する形が許容可能であるのは当然のことである。ところが、

J'ai laissé ma secrétaire lui écrire une lettre d'excuse.

J'ai laissé ma secrétaire l'écrire au client.

などから、*ma secrétaire* を落とすと、許容可能だが、古い (*vieilli*) 感じがするとのことであり、動詞が *voir* の場合は、許容不可能であるという結果を得た。

J'ai vu ma secrétaire lui écrire une lettre d'excuse.

*J'ai vu lui écrire une lettre d'excuse.

いずれにしろ、補文主語が現われないときは、*faire* に限らず、*laisser* や *voir* でも、文融合2が唯一の可能性となりつつあるようである。

(注6)

間接目的語は、指示対象が明らかな場合、比較的自由に表面から消えることができる。(40, 特に、後に取り上げる(43b)については、むしろ、“lui”が表面に現われない形の方が好ましいようである。

(40') Il fait casser les bras au coupable, ou les couper.

(43' b) Il les fait casser au coupable, ou couper.

これは、“au coupable”と“lui”が近すぎるからとのことである。また、(40')は、(40”)のように言い換えることができる。

(40”) Il fait casser les bras *du* coupable, ou les couper.

この文では当然 *couper* の前に“lui”は現われる余地はなくなる。(40')なども、構文が無視され、(40”)と同じように考えられているのかも知れない。

(注7)

副詞的代名詞 *en* もこうした構文に現われることができる。

Il a fait entrer les enfants dans la maison et en sortir les parents.

また、これ以後、y や en の例は扱わないので、他動詞とも共起できることを示す例をあげておく。

J'ai fait entrer les enfants dans la maison et y chercher leurs parents.

この例では、chercher の意味上の主語は、les enfants ではなく、不定主語 quelqu'un である。“Les enfants y cherchent leurs parents” の意味では、非文法的である。

次の例では、第 1 文の leur(=aux enfants) が、第 2 の文では faire と一緒に消去されたと考えることができる。

Je leur ai fait ratisser la maison et y chercher les livres perdus.

このため、chercher の意味上の主語を les enfants と考えることができる。また、この例でも、chercher の主語は、不定主語 quelqu'un と考えることは可能である。

(注 8)

失業者が de で導入される例でも結果は同じである（以下の判断は、DENIAU 氏による）。

Je ferai battre ce chien par le jardinier et m'en ferai obéir.

*Je ferai battre ce chien par le jardinier et m'en obéir.

この“me”の再帰代名詞と考えることができる。そのため、通常の代名詞と別の理由で許容されない可能性もある。したがって、次の例をあげておく。

*Je ferai battre ce chien par le jardinier et lui en obéir.

(注 9)

他動詞の直接目的語でも、部分冠詞で導入されるものや、否定文での“de+名詞”は、en による代名詞化ができる。この構文にも、直接目的語に対応する代名詞 en が現われることができる。

Il fait voler de l'argent aux riches et en donner aux pauvres.

(注10)

参考までに、ここで取り上げなかったデータについても触れておくと、反能格自動詞としては、

chanter, crier, jouer (du piano), pleurer, sauter

があり、他動詞としては、

applaudir, arrêter, jouer (un rôle), laver, manger, prononcer, quitter, réciter

に関するものがある。しかし、これは本文であげた例文から得られる結論に何の影響も及ぼさない。

(注11)

倒置を含む等位文では、省略可能なのは、最初の文の主語であり、第 2 の文の主語は省略できない。

Ainsi a été conçu et réalisé ce projet.

*Ainsi a été conçu ce projet et réalisé.

これは、むしろ直接目的語の等位構造縮約に類似している。

Il a ainsi conçu et réalisé ce projet.

*Il a ainsi conçu ce projet et réalisé.

(注12)

非人称構文の主語 il については面倒な問題が残る。例えば、

Il faisait nuageux ce matin, mais fait très beau maintenant.

Il mourra beaucoup de vieux et naîtra autant de bébés cet hiver.

このときに、先行詞 il と消去された il をどのようにして同一指示名詞句とすれば良いのだろうか。この il はそもそも指示物を持たないと考えるのが普通だから、同一指示かどうかは問題にさえもならないはずである。すぐに考え付くのは、プロトタイプ理論で、典型的には同一指示という条件が要求されるが、指示そのものの可能性まで奪われてしまった場合は、この要求が緩和され、形態上の同一性だけでも許容される、といったような考え方であろう。

もっと別の提案もある。面白いのは、Chomsky (1981) のもので、概略、次のように考える。言語の存在論は、現実の存在論と完全に一致するわけではない。言語の存在論では、非人称主語に対応する存在物が容認される。すなわち、言語の存在論に基づく指示物の領域には、非人称主語の指示物が存在しており、この同一性が消去を可能にしていると考えるのである。

また、次のような例も、同一指示とは何かという問題を提起する。

Jean aime sa femme et Paul aussi.

このとき、Jean の妻を、例えば、Marie とすると、第1の解釈では、Paul が愛しているのは Marie ということになるが、別の解釈では、Paul は Jean の妻 Marie を愛しているのではなく、自分の妻、例えば、Jacqueline を愛していることになる。第1の同一性は、概念的にはより単純な個体同一性であり、第2の同一性は関係の同一性である（これは、不完全な同一性 (sloppy identity) と呼ばれる現象である）。この第2の同一性を明確にするには、例えば、ラムダ演算子を用いる方法がある。

$((\lambda x) (x \text{ aime la femme de } x)) (\text{Jean}) \text{ et } ((\lambda x) (x \text{ aime la femme de } x)) (\text{Paul})$

実際、基本的には、これと同じアイデアに基づく提案もなされている。これに対し、Fauconnier (1984) では、第1の同一性は、値 (valeur) に関するものであり、第2の同一性は、役割 (rôle) に関するものであるという提案が行なわれている。

また、この種の不完全な同一性による消去は使役構文でも可能である（次の例では、“les” は、例えば、les bras, les jambes などとする）。

Il les fait couper au coupable et (les fait) casser à son père.

(注13)

人により、この制約が単に形態上の一致にまで弱まることもある。Kayne (1975) のあげている例には、

次のようなものがある。

Paul te fera gifler par Georges et donner des coups de pied par Jean.
Paul s'est fait gifler par Marie et donner des coups de pied par Pierrette.

me, te, nous, vous, se では、たまたま直接目的語と間接目的語が形態上区別できないので、文法関係が異なる要素間でも縮約を行なう人もいるが、これらの人も、3人称の代名詞では、文法関係が異なれば形態も異なるから、このときは縮約は可能でない。こうした人では、縮約の条件は、文法関係の一致でなく、形態の一致に変わっている。

通常の名詞句が関係する場合は以下のように、直接目的語と前置詞の目的語の間の縮約が見られ、事態はさらにややこしくなる。

Luc estime, et compte beaucoup sur Paul.

このときには、“estime”の上に強いアクセントを置く発音が普通らしい。また、次の例では、“et ne modifie en rien”は、“ne rien à voir avec”と同じことの言い換えとして、挿入句として扱われる。

Ce phénomène n'a rien à voir avec, et ne modifie en rien, la théorie.

この例の avec のように、直後に名詞句がなくても良い前置詞もあれば、そうでないものもある。

*Pierre se soucie *de*, et téléphone tous les jours à ses parents.

*Le père a téléphoné *à*, et a grondé son fils.

(注14)

これも、実際には、もっと複雑である。例として、複合時制における、直接目的語代名詞を含む、等位構造縮約に関するデータをあげる。以下では、(…)は省略可能であることを示し、[?](…), * (….)などは省略が困難、または不可能であることを示す。((…) …)では、まず内部のカッコ内の要素だけが省略され、次に外部のカッコ内の要素すべてが省略される。

A. 使役構文+使役構文

α. 他動詞の直接目的語

- Jean l'a fait promener dans les bois et ((l'a) fait) assassiner par un tueur à gages. (la=cette femme)
- Le policier l'a fait parvenir à un spécialiste et ((l'a) fait) examiner par celui-ci. (le=le document)
- Cela les a fait encore monter et ((les a) fait) acheter par des spéculateurs. (les=les actions de cette société)

β. 自動詞の主語

- Jean l'a fait battre par un jardinier et [?]((l'a) fait) obéir. (le=le chien)
- Il l'a fait planter dans une serre et [?]((l'a) fait) grandir rapidement. (le=l'arbre)

B. 片方のみ使役構文

α. 他動詞の直接目的語

- Le kidnappeur l'a d'abord fait téléphoner à ses parents et [?]* (l'a) tué ensuite. (le=l'enfant)
- Le médecin l'a fait ausculter par un interne et ^{??}((l'a) examiné ensuite. (le=le malade)

β. 自動詞の主語

- a. Le kidnappeur l'a menacé et (l'a) fait téléphoner à ses parents. (le=l'enfant)
 b. Il l'a réchauffée au four et (l'a) fait fondre plus vite. (la=la viande congelée)

A β と B β より、自動詞主語起源の使役構文の直接目的語代名詞の省略では、faire まで消去されるなら、許容度は低下するかのようと思われる。ところが、これは例文の選択に問題がある。例えば、本文中の(118)は、

Le vent les a fait voltiger et ((les a) fait) tournoyer en l'air. (les=des feuilles)

のように、faire の消去が可能である。一方、

Je l'ai fait battre par le jardinier et *((l'a) fait) mourir.

だけを例にとると、faire の消去は単に許容度を落とすだけでなく、全く非文法的な文を生成すると結論しかねない。ここでは、結合される文の平行性などが、判断に影響している。結局、文法が関与する限りでは、faire の消去も可能であるが、語用論的要因で許容されなくなる文が多い、というのが実情であろう。

また、A α と B α では、文の複雑さが判断に関係しているのが見られる。これも、根本的には、語用論的事実である可能性が高い。

間接目的語の省略でも、似たような現象が見られる。

- α . Luc lui a fait laver la vaisselle et ((lui a) fait) promener le chien.
 β . Luc lui a fait téléphoner par sa secrétaire et ?((lui a) fait) cacher le dossier compromettant.
 γ . Luc lui a fait promettre un prix littéraire par des jurés vénaux et ?(?lui a) fait) écrire un roman.

α では、lui (=son fils)はともに主語に対応しており平行性が高い。 β では、lui (=Paul)は、最初の文では téléphoner の間接目的語、第2の文では、cacher の主語に対応し、平行性は低い。そのため、ここでは、faire の省略が難かしくなる。 γ は β と全く同じ構造である(第2の lui を受益者とする読みも可能だが、ここでは考慮しない)、ところが、ここでは、いかなる省略も困難である。この β と γ の差は、次のような文にも持ち越される。

- β' . Luc lui a téléphoné et (lui a) fait cacher le dossier compromettant.
 γ' . Luc lui a promis un prix littéraire et ?(lui a) fait écrire un roman.

また、次のように lui がともに受益者である例では、省略は容易になる。

- δ . Luc le lui a promis et (le lui a) fait attribuer par des jurés vénaux.

(注15)

例えば、単なる代名詞化が問題となる、次の α や β では、第2の代名詞 le の先行詞は、le chien (または le) でも、le jardinier でも構わない。

- α . J'ai fait battre le chien par le jardinier et l'ai fait obéir.
 β . Je l'ai fait battre par le jardinier et l'ai fait obéir.

ところが、消去のある γ では、消去された要素の先行詞は第1文の le に限定される。

γ. Je l'ai fait battre par le jardinier et fait obéir.

こうして、解釈の可能性が狭まるのが見られる。

(後記)

この論文の主な内容について、幸運にも、1987年1月14日にパリ第8大学言語学科のセミナーで発表討議する機会を与えられた。その便宜を計ってくれた Pierre Encrevé, Gilles Fauconnier, Alain Rouveret の各氏に感謝したい。

当然予想されることであったが、この発表により、ここで取り上げられている例文についての文法性の判断が話者により大きく異なることが確かめられた。そのうち、この論文で示されている判断と異なるものについて簡単に触れておく。

avoir だけの省略を含む (33 b) も、それほど悪くないとする人もいた。こうした人では、救済原則は faire の省略をまたず発動することになる。

比較構文での省略を含む (37 b) は、その場にいたフランス人全員が全く問題なく許容可能と判断した。これに対し、接辞代名詞が前文の要素と同一指示でない (38), (39) は許容可能性の限界すれすれとする人が多かった。

(40) に対しては、(注 6) で述べたのと異なり、lui は省略できないとする反応が多かった。また、(43 b) についても、これを許容可能とし、(43 a) よりむしろ好ましいと判断する人もいた (例えば、Encrevé)。(43 b) が許容可能であるなら、4.2 の議論をさらに強力にすることができる。

やや意外だったのは、主語からの en の遊離の現象で、(80 b) を許容可能とする人が半分以上いたことである (不可とする人もいた)。

反対格述語を含む例で唯一許容度が割合に高いと判断された (89 b) については、すべての人が不可とみなした。かつ、(90 b) 以下の例と文法性の差異はないとのことであった。したがって、仮説 2 の成立可能性は全く無いことが明らかとなった。

引用文献

- Chomsky, N. (1981) *Lectures on government and binding*, Foris Publication
 Fauconnier, G (1983) *Generalized union*, Tasmowski and Willems (eds) *Problems in syntax*, Plenum
 Fauconnier, G (1984) *Espaces mentaux*, Editions de Minuit (Mental spaces, 1985, The MIT Press)
 Kayne, R (1975) *French syntax*, The MIT Press
 Ross, J. R (1986=1967) *Infinite syntax!*, ALEX Publishing Cooperation (*Constraints on variables in syntax*, 1967, Doctoral Dissertation, MIT)
 Rouveret, A. and Vergnaud, J. R. (1980) *Specifying reference to the subject*, *Linguistic Inquiry* 11. 1
 坂原 茂 (1985-1986) 関係文法とフランス語, 『ふらんす』1985年2月号-1986年9月号, 白水社